

風土



萬 愚 節 海 を 濁 し て 三 鬼 死 す

(句集『竹取』より昭和三十七年作)

桂郎師の食通ふりは有名です。「七輪に鯨たらたら」とありますから、血のしたたるような鯨肉を焼いているところ。普通は野菜をたつぶり入れて「鯨汁」にしたり、すぎ焼風に「鯨鍋」にしますが、桂郎師の場合お酒の肴にするので、直接焼いているのです。もちろん、もう一方の手にはコップ酒が握られています。「稿なりて」にひと仕事終えた安堵感があります。

鬼 燈 市 職 人 の 影 折 っ て 寄 る

(句集『竹取』より昭和三十七年作)

「鬼燈市」は七月九日に浅草観音の結縁日で、鬼燈は煎じて子供の虫封じ、女の癩癩に効くと信じられ、境内は鬼燈を売る店で賑わいます。桂郎師も店の一つに寄りました。「職人の影折つて」に、理髪師であった頃の自分を見えています。その頃からの店の主だったのかもしれませんが。「われは」の前書きがそれを示しています。

太陽の中よりきちきちばった来る

(句集『能ヶ谷』より昭和五十八年作)

まず季語の「きちきちばった」に対し素材は「太陽」だけです。それを「中よりくる」と繋ぎました。この単純な構成が、ぎらぎらとした巨大な太陽から、突然「きちきちばった」が飛び出してきたかのようにイメージさせます。このように素材をぎりぎりまで削ぎ落し、季語を生かす(きちきちばったの力強さ)表現法も器師独特のものです。

こともなき二百十日の家めぐる

(句集『能ヶ谷』より昭和五十八年作)

「二百十日」は立春から数えて二百十日目の、新暦の九月一、二日目にあたります。古来風雨の激しい日とされ、この時期早稲の花が咲く頃で、農家は大風を恐れました。この句では「こともなき」と平穏な「二百十日」となると詠んでいます。が、「家めぐる」に器師の心理が読み取れます。安堵感と共に、もう一度家の内外の風に弱い箇所を見てめぐるのです。さらに「二百二十日」、「二百三十日」と安心はできない日がやってきます。

おうと

南うみを

若狭・常高寺にて月遅れの

ぼうたんのかくも崩れて放哉忌

ゑんどうのにぎやかな揺れ摘みにけり

じやがたらの花浮き喉の渴く日ぞ

月の夜の玉葱畝に浮かれ出づ

枝蛙しづくの翅を啞へをり

沢蟹の這ふにまかせて滝不動

箱眼鏡入江舐め尽くして戻る

流木は老漁夫の椅子あいの風

枇杷挽ぐやぬくとき雫首すじに

風青し鰓から肺へ呼吸替へ

生田緑地 二句

老鶯に艶や藁屋根あればなほ

峰雲へおうと太郎の「母の塔」



竹間集

同人作品



豆 飯

田中佐知子

賛美歌の声は光に聖五月
聖五月空へ放てる伝書鳩
胸に抱く赤子の鼓動聖五月
三四郎池鬱々と五月来る
穂高指すベースキャンプや五月来る
豆飯の出で「いもぼう」の昼の膳
豆飯や平成の代の終はらんと

夏つばめ

柴田 久子

民家園歩く日傘の人となり
シャンデリア吊り古民家の夏座敷
藁屋根に光陰ありて夏つばめ
緑蔭に入りて樹のこゑ鳥の声
万緑を動かしてゐるブルドーザー
荷車に子等乗せ替へる麦の秋
麦秋や昔のままの散歩道

風薫る

中村 洋子

田安門くぐる剣士や風薫る
朝駆けの子馬のうなじ風薫る
風薫る木のコゑ水の声すなり
黒潮の洗ふ奇岩や梯梧咲く
みなと祭少女に長きトロンボーン
水を押す水の階段緑立つ
夏空へ飛んで太郎のまなこかな

大鏡

橋添やよひ

祭近し調教馬場の大鏡
葉桜や手綱しなやか女騎手
老鶯や業平朝臣の棲みし寺
篠の子や塩釜跡を縄囲ひ
鳥影や去りがたくをり花の寺
灯にくるや灯のいろとなり草かげろう
師が遠くなりゆく日々や花曇

山椒魚

浅田 光代

捨苗や荷台に泥をしたたらせ
投げ釣りの女の素足波が打つ
引揚げ棧橋先の先まで灼けてをり
いつの世と山椒魚の目が問へり
雲の峰父に慟哭一度きり
脱ぎ散らす竹皮竹の皮のうへ
花檣空の青さをそこなはず

五月の雨

柿沼 盟子

ひとまはり大きく枝垂れ花は葉に
北斎をたづぬる町の夏めきぬ
斑猫や私道出口に凸面鏡
母の日の窓を開けば鳥の声
横長の郵便受けや鉄線花
茅花咲く地盤沈下はまだ続き
辞書を閉づ五月の雨のきらめきに

美作路

高村 令子

囀つて囀つて邑消えてゆく
蝶急ぐ五月の風をかいくぐり
柿若葉さらりと愚痴をこぼしけり
遠蛙闇をひろげてあたりけり
青田はや彩たくましき美作路
雨後の風命さやかや夏木立
響き合ふ命の山河青嵐

山河集

同人作品



南うみを選

馬宿の蹴り跡 烈し 青嵐
花道の先に空あり 夏の蝶
水木咲きふるさとに 汲む神の水
梅雨近し 藍甕の 藍熟 戊申

塩田博久さん句集

電子版『良夜』 賜る 春の宵

たまゆらの風を誘ひて 白牡丹

実篤公園 四句

内藤 静

実篤邸に若葉の風や 是好日
めがね遣く 机上若葉の日の光
緑さす 書架に 白樺創刊号
胸像は 和服菖蒲の花の池
差し茅の屋根の継ぎは ぎ竹の秋

川田 好子

古民家の 框に 忘る 夏帽子
妹も 半纏 せがむ 祭 笛
関取の 鬢付 け 匂 ふ 夏 来 る
三 番 叟 の 舞 始 まり ぬ 柝 の 花

奥田 茶々

汗ぬぐふ 阿修羅のごとく 頬染めて
平城京まばらに うたふ びりかな
放鷹や 大極殿の 空は 夏
刈られたる ひつじ まんまる 青嵐
日盛やしつぽより 出て アルマジロ
燕来る 路地 いっぱいに 楽書す
太子像へ さざなみとなす 藤の花
天上へ 光りかへして 朴の花
廃校は 家具 工房や 麦の 秋

豎山 道助

風土独語／南 うみを



馬宿の蹴り跡 烈し 青嵐 中嶋 陽子

この句は川崎市の生田緑地の古民家園での作。「馬宿」は奥州街道にあった市に向かう馬方と馬が泊まった宿で、馬を土間に繋ぎました。「蹴り跡 烈し」が売られ行く馬たちの哀しさをまざと伝え、「青嵐」のざわめきがそれを増幅しています。

万緑と太郎の赤といづれ勁き 赤石 梨花

これも生田緑地の「万緑」と記念館の岡本太郎の作品のダイナミズムを表現しました。原色を好んだ太郎の「赤」の、緑地の「万緑」に負けないほどの強烈さを「いづれ勁き」と置いたのです。

緑さす 書架に 白樺 創刊号 布施まさ子

「白樺創刊号」は武者小路実篤を中心とする雑誌の創刊号です。彼らの熱い想いの同人誌を前に、作者は緑陰に立ち尽くします。「緑さす」から「新しき村」の木立もさもあらんと想像します。

つくらぬ田その上越えて 田水引く 森屋 慶基

田水を引くの、我が田の上手にある「つくらぬ田」を通さなければならぬ。おそらく田圃の荒廃が進んでいるのです。作者

のやるせない心情が「その上越えて」に汲み取れます。

閑取の鬢付 匂ふ 夏来る 奥田 茶々

両国の「夏場所」を、「夏場所」と置かずに読み手に想像させて成功しました。両国界隈を「閑取」たちがにぎやかに往来しだすと「夏場所」に近い。その活気を「鬢付 匂ふ」で伝えていきます。

郭公や二段に開くお弁当 岡 尚

「郭公」から明るい林と草原を想像します。「お弁当」から緑陰の木の椅子での食事を、「二段に開く」からお重形式のちよつと豪華な弁当を想像します。郭公の声が爽やかです。

日盛やしつばより出てアルマジロ 雨宮 桂子

「アルマジロ」の背中は固い甲で覆われ、危険に際し体を丸めて球状になり、身を守ります。危険が去り固い球が解れ始めました。最初に出て来たのはその尻尾です。作者はその生態を見逃しません。「日盛や」も熱砂をイメージュさせます。

ねころびて 茅花流しの底にゐる 川田 好子

「ねころびて」とあるので、作者は草庵に寝て「茅花流し」を見ているのです。眼のはるか上をなびく茅花を仰ぐうちに、身体が沈んでいくような感覚になり、「底にゐる」と置いたのです。

〈以下略〉

風土集



南うみを選

日本民謡 二句

万緑と太郎の赤といづれ勁き
夏炉の辺昔語りもありぬべし
えご咲いて長身波郷佇つごとし
麦秋を遠く機関車連結す
直虎の幟も立てて祭かな
大輪の緋牡丹を剪る躊躇なく
雨粒に緋の色映える牡丹かな
敷き詰めて褪せぬ緋色や大牡丹
つくらぬ田その上越えて田水引く
植田風宅地の中をたもとほる
飛魚や三浦半島けふも晴れ
薫風やバルビゾン派の絵画展
花入を竹籠にして新茶汲む
郭公や二段に開くお弁当

横浜

赤石 梨花

横手

森屋 麿基

相模原

岡 尚

泡盛の馥郁として海紅豆
ねころびて茅花流しの底にゐる
まなかひに大棧橋置き大南風
飛魚とんで連絡船の出航す
さんざめく歩行者天国薄暑かな
一輪車笑顔廻して風薫る
札所寺青葉若葉に沈み込む
暫くは御仏拝す手鞠花
ぼうたんの富貴を床に移しけり
若葉風塔を丸ごと吹き上げる
若葉雨春日奥山背伸びせり
白といふ涼しき彩や水芭蕉
田を植えて新しき風まとひけり
すぐ返る峽の木霊や山笑ふ
失ひしものを求めて遍路杖

東京

川田 好子

上條

上迂 蒼人

伊東

吉永 すみれ